

朝鮮半島の文化

——特に藝術の根源に就いて——

梶 原 重 道

私は朝鮮半島が生み出した藝術ミ云ふものに少からぬ關心を持つてゐた。そして嘗て知り得たその作品に對する理解ミ、事實此の半島に於て確め得る作品ミの間に果して如何なる一致をみるであらうかミ云ふ事が一つの好奇心でもあつた。

四月廿八日は快晴で而も恵まれた日曜の午後である。私はこの一つの目的のもミに平壤博物館へかけつけた。僅か數時間熟視め得た小さな知識を以て餘りに豊富な半島藝術を云々する事の輕舉をよく知つてゐる。然し平壤博物館に收められたものゝ中から私の意を満たすには充分な時間であつた。

朝鮮美術の特徴は細い、柔い曲線にあるミ云ふ事は嘗て學んだ所であつた。その先入主が手傳つたせいもないではないが確かな根據はそれにある事も事實である。然し私はその他に「清楚、純朴」ミ云ふものを發見した事は此の日の何よりの喜ばしい收穫であつた。

此の事で思ひ出すのであるが、昨冬偶々私が朝鮮に入營したミ云ふので數ある作品の中で只此の一枚だけが頭に残つた、ミ云つて私の心境を理解して呉れたY氏が森守明氏の帝展出品畫「搗麥」の寫真一葉を贈つて呉れた。そのY氏的心づかひに對しては涙ぐまされた程その頃の私は生活の變化に感傷を覺えてゐたのであるが、その時受けた畫面の印象

は全く此の「清楚ミ純朴」なるものに満たされてゐた事を今尙はつきり覺えてゐる。尙一昨年の帝展出品畫にも確か麥僊氏のものに朝鮮の風俗を畫いたものがあつた様に記憶してゐる。それらのものがその頃氣づかなかつた事であるが今云ふ「清楚」ミ云ふ觀念を強め得た事に於てしきりに懐しいものを感じるのである。彼等の生活ミ習俗その儘がそれらの畫面に表れた程美しいそして清楚なものであるかは更に考慮を必要とするが、たゞ彼等の生活ミ風俗を美に迄高めたミ云ふ點に於てその儘のものであり得よう。

更にその畫面にも溢れてゐるように「悠長」ミ云ふものも此の民族の持つ特質のやうである。従つて此等の特質が彼等の文化の上に、そして藝術の上に多大の影響を及ぼしてゐる事は云ふ迄もない。

就中樂浪郡時代の方格規矩四神鏡、流雲文方格四神鏡にその高い氣品ミ高雅を認め得た事は意外であつた。尙同時代の瓦壺、陶壺、墨繪の陶甕に、綠釉もの、七枝燈架（助王星出土）に九枝燈架、小皿、耳皿、着釉壺に、繪畫壺、銅燭臺、銅洗、銅壺、そうしたものに表れた線が全く柔い感觸を與え、そしてそれらの色調が全く落付きをみせてゐた。

高句麗時代のものミしては石佛、土佛、埴佛、石造千體佛、金銅如來坐像の他硯石、青銅淨瓶に心をひかれ、就中別館の古墳彩篋塚木槨（樂浪時代のもので、是については特筆すべき諸種の點があるが後述する）に無限の驚異を感じたものである。

然し是等のものを通じて時代の推移ミ、民族性の變境を考へるミ云ふ事に私はなぜか一つの淋しいもの、介入を意識したのである。それは是等の作品は確かにその氣品に於て、線に於て、又色に於て秀れたものに違ひない、然しそれの儘が彼等の藝術一般を伺ふ資料ミなるだらうかミ云ふ事を知つたからである。

是等の作品は城内の藝術であつた、決して民衆のものではなかつた。従つて是等を生み出した一部の人々ミ、一般民

衆との間には非常な距りのある事は確かである。然し半島藝術を代表し、半島藝術の王座を築いたものは此の兩時代であつた事は又確かである。だから是等のものによつて過去の民族から現在の民族へ、更に來るべき將來の民族に向つての考案を試み、同時に彼等の生活への理解に幾らかの資料を與へられつゝそれを考へるであらう。

文化はその民族が齎らす生活の結晶でなければならない。生活さもしかけ離れるとすればそれは單なる外來への模倣であり、文化の爲の文化でしかあり得ない。藝術品についても亦此の事が云はれる。

此の意味からしてその時代が生んだ藝術品がその時代人の生活であることすれば、その作品の變遷は歴史的に時代の變遷を物語り、更に彼等の生活程度の變遷と同時に民族性の推移をみて差支へはない筈である。

殘された作品を通じてその民族の生活を考ふべきであり、その民族性が考へられない限り、如何なる藝術品も餘りに骨董品でしかあり得ない。古きものが尊ばれ、珍重がられる所以は知る事の出來ない、見る事の出來ない時代人の生活が推定され、そしてその事がやがて來るべき生活に對して何らかの貢獻が豫約されるからでなくてはならない。

新文化の建設云ふ事は此の意味からして決して外來の模倣であつてはならない。その民族が持つ生活を離れて若し新文化云ふものが建設されることしたら、その危殆は充分認められねばならない。

外來輸入の文化にその表層的な影響を受け、その民族性が生み出す文化の根源を忘れる事程、悲しい、そして恐ろしい事はない。勿論他文化の長を採り粹を汲む事は望ましい事である。然しその事は模倣ではなくしてそれをその民族性により、その生活により同化し充分こなす事を意味すべきである。

此の健全なる状態に於て消化され、創出されるものが不朽の藝術品云ふ事となる。従つて藝術としての價值は一面その民族が最も多方面に健全なる状態にあつて顯現した美の如何にあること云ふ事が出來よう。

朝鮮文化の全般に關しては今の所何ら知る資料を持たないが、たゞその藝術的方面に關して、それも極めて限られた一部にてはあるが、歴史的に三つの變遷があつた。即ち一つは佛教の齎らした大きな影響であり、第二に儒教が齎らしたものであり、第三にキリスト教のそれである。

此の中何れが最も朝鮮藝術としての根柢を築き、而も最も健全な歩みを辿らせたかは、各種の方面から考究されねばならないであらうが、少くとも殘されたそして近時古墳から發掘された様々のものを通じて、佛教的色彩の最も濃厚である事は否めない事實である。

樂浪郡時代に見られなかつた佛像が、高句麗時代に於て頗る刻まれた事も發掘された佛像の種類によつて明らかに想像出来るのである。歴史に是を徴しても佛教の傳來は高句麗第十七代小獸林王二年である云ふ。この史實を基調とする限り樂浪藝術は所謂朝鮮傳統の藝術であり、高句麗藝術は明らかに獨自な佛教藝術の合流したものの云へるのである。然し、高句麗は樂浪の末期別個に發達したのであるから、それと時を同じうする樂浪末期の藝術は、いきほひ佛教の影響を受けた事は容易に認められるのである。

が何れにせよ此の時代の末期から李朝時代にかけてその功績も大きかつたであらうが、儒教の影響した災も亦大きかつた。李朝時代に於ける過去半島文化の壊滅と更に來るべき文化への阻止を憚らなかつた云ふ儒教の災に、若き半島民衆が醒めた時、新しい時代への建設をしきりに夢みた云ふ事である。然し此の事が同時に新しい文化の胚胎である事は否まれなかつたであらう。

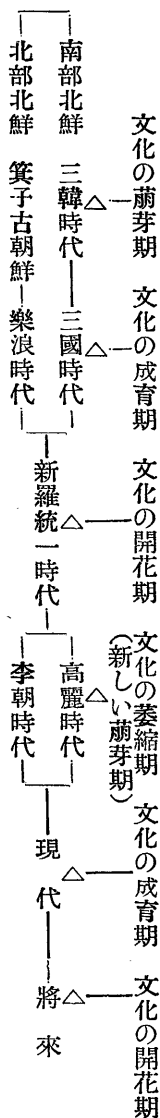
此の新しい文化の胚胎をして育てようとした彼等の努力も根強く張られた儒教の思想に打ちかつ事は非常な力であつた。此の時偶々合流したものが新しいキリスト教の傳來であつた云ふ。然し、三國時代の文化に合流した佛教に比して極めて困難な合流ぶりであつた事は此の多難な時代が物語つてゐる。かくして數百年間は云ふ進捗もみずに今日に至

つた。これが大きく分つた朝鮮文化の過程である。

此の極めて概括的な見方が許されることしたら、朝鮮藝術は樂浪と高句麗時代を除いて何等のみるべきものが存しないであらうし、又あるにしてもそれは兩時代の單なる末梢的な模倣品でしかあり得ないであらう。

されば朝鮮藝術の本源は獨り樂浪及び高句麗時代の遺物に於てのみ窺はれるのではあるまいか。此の兩時代のことを私は先に城内文化の粹と云つた。然し是等によつて敢へて半島藝術一般を推考しようとする理由も亦茲にあるのである。

大毎懸賞論文の當選稿である林春吉氏の「半島文化の將來」には歴史的にその文化の考察を次表の如く試みてゐる。



然し、文化一般の考究は或はこれで許されるかも知れないが、私のみる少くも藝術に關しては、現代は氏の云ふ成育期ではなくして、全く頽廢期であり萎縮期である。そして將來は勿論開花期は豫想されねばならないがその開花期が華やかに迎へられるとすれば、それは我々の手によつて充分半島民族の生活を向上せしめ凡てに對するよき理解を與へ、而る後彼等が持つ傳統的な藝術的素養を湧出せしめての上でなくてはならない。そうでない限り、現在の半島民族の手によつては目覺ましいこの點の活躍は豫期されない、と云つても敢て過言ではないと信じてゐる。

然し嘗て三中井樓上で開かれた朝鮮各種學校生徒作品の書畫展覽會に見受けたものに、且又鮮展入選畫に從來朝鮮が持つ柔い線ではなくて、むしろ太い線を認め得た事は痛快な事であつた。將來の半島を背負つて立つ若い青年學徒の希

望み熱だが、此の線への表徴であるをすれば誠に慶賀に堪えないものがある。

然し藝術云ふものを分つて、私はいつも特殊藝術と一般藝術と云ふものを區別して考へてゐるが、勿論是は表面的な區別であるかも知れない。その根源を流れてゐる精神に至つては同じ一つのものが汲み出されねばならないのであるが――府内の各大小の店頭が半島独自の屋根の曲線を、その美を徒らにエナメルとペンキで塗りつぶしてゐる現象は、確かに一つの半島文化並に半島藝術に對する彼等自身の無自覺を物語るのみねばならない。トタン張りペンキの不均整な色調が彼等の屋上に客を呼ぼうとする誤つた文化への見解に對し、幾年かの間幾多の藝術を此の下に生み出した豊かな曲線の屋根は、その看板裡にひそかに涙してゐるのではあるまいか。

自らのよさを自ら忘却する事程藝術にこつて悲しい事はない。目新しいものを模倣する云ふ事、藝術的に新しいものを生み出す云ふ事はもとより截然に區別がある筈である。此の點からして朝鮮半島の文化は確かに進んだに違ひない、にもかゝはらず半島に住む人々の生活に、落ちつきと幸福らしいものを認める事の出来ないのは何故であらうか。此の原因が果して奈邊にあるかは私にもわからない事ではあるが、誤つた文化への見解として一例を先に掲げたのであるが、私はその理由をそれに結ぼうとする。即ち、外來文化の無自覺なる模倣で、同化ではなかつたからである。彼等が生み出したものではなくて單なる目新しいものに對するもの眞似に過ぎなかつたからである。

例へばあの白衣の常服に長煙管を持つた悠長さはそれ以外何の條件も考慮に入れない事に於て、私は非常に好感を持つのであるが、その姿にソフトを冠した異容にスツカリ此の好感を棄てて了ふのである。これが現在の朝鮮文化と云ふもののプロフィールでもある。

朝鮮民族が朝鮮民族として他の模倣も追隨も許さないものがある筈である。然し彼等は是をのばし是を育てる事に無關心であり、無自覺でありすぎる。そして農村青年の悲哀に似たものがやはり彼等の意識するものになつてゐる。草根

木皮で餘命をつなげばいゝ人達が餘りにも多いからである。そして文化を育てようとする事は彼等にまつてむしろ一つの重荷でしかあり得ない。そこに容易に健全な新文化を建設し得ない彼等の弱點がある。

時代の要求だから云つて徒らに新時代に適應するかの如く考へて外來文化の模倣に努力する愚かさよりも、半島獨自な傳統的文化の蘇生に餘念なき虔ましさに私は遙かにその賢明さを知るものである。

そして華やかな西歐文化の攝取に努力する事に先立ち、堅實なる田園文化の建設云ふ事の方が彼等にまつて遙かに急務の様に思へる。

健全なる文化の建設は、健康なる思想の平靜から生れるものである云ふことを私はいつも考へてゐる。従つて彼等の思想から動搖性を葬り、精神から浮游性を抛棄せしめない限り、それらの望ましいものゝ建設は憧れて達し得ない虹に似る感がある。

放逸なる彼等の無自覺無反省な生活の日々が既に過去の夢となり、思想に、精神に安らかな静けさの漲る日を待望してやまないのである。これが華かなりし樂浪、高勾麗藝術から現代に眼を轉じて感じ得る一つの廢頹的な淋しさであり、同時に現代文化を萎縮、頹廢期となす私の最も根本的な理由である。

稿を舊に戻して朝鮮特有の藝術を知る爲にその線について考へてみたいのである。

前にも一言したように朝鮮の線は曲線である云ふ事は、否まれないのであるがその曲線も私は、あの瓦壺に於てその全分的なものを見る事が出来ると思ふ。

瓦壺は彼等の日常生活に缺く事の出来ないものになつてゐる。何故なれば水の供給は凡てこの壺が役立てるからであ

る。

日常生活になくてはならない器具の一切が凡て曲線を失ふ事の出来ないものになつてゐる。それはたゞひ藝術的價値の全然認められないものにしても、緩かな曲線によつて編まれ、作られてゐる事は確かな事實である。日常はきしめてゐる各種の靴は勿論であるが、片時も離す事の出来ない眞鍮の食器から匙に至るまで凡て曲線の合成である。

低くて、淺くて、長い彼等の家屋から日常品の悉くが何が故に曲線が用ゐられたか、大陸的な荒漠たる平原が彼等の此の線を生み出させたのか、傳統的な由來なき徒らな模倣が續行してゐるのか、その理由は奈邊にあるにしても私はその線が秘むる半島民族の性情を考へないわけにはゆかないのである。

過去二千數十餘年に涉つて半島民族が生み出した、あらゆる藝術の心に近づく事は確かに此の線の秘密を解く事であると思ふ。青樹一本生へない丘陵の上を懷手に着流した白衣の裳をなびかせて、アリランを鳴咽しながら瓢々歩んでゐる姿が、又實際に長くひいてゐる床かしい樓臺の欄干に終日動かうもしないで、長煙管をくはえて惘茫然としてゐる白衣の姿が、單に希望も、目的も失つた無自覺な形骸として見逃して了つていゝ點景であらうか。

極めて稀にみる子供の他に色彩を失つた白衣が、常服として選ばれ、その間黒衣も、紺衣が應々に使用されてゐる。うら若い乙女が既にこれである。派手な色彩も模様の交錯が、食慾以外に彼女達を喜ばせる筈の娘氣分を如何に缺いてゐる事か。

罐詰の空罐も、拾ひ集めたブリキ板をたゞいて興する他に何一つ玩具を持たない子供達の生活は、私に何を教えたか。若草の平原にタンポ、も咲く、スミレも咲く、豆科の紫の美しい花も咲く、然し蓬の根を掘り取る事は出来ても、此の美しい草花の一輪をさへ摘み取る子供を見受けないのは何故であらうか。

私は是等の疑問を解く前に、その豫備的な常識として考へてみたい事は、渦高く積み重ねた枯草を背負つて丘上に夕陽をあびて立つてゐる老人の姿である。そして私はそれを目撃する度に思つた、これこそ解しなければならない朝鮮民族としての人生圖である云ふ事を。「朝鮮民族ミ枯草、そしてその枯草ミ老人」これが半島文化の現況であり、同時に半島民族の生活の表徴である事をしみじみ知つたのである。

我々にまつては枯草ミ生活をそれ程密接に考へる事は常識として一寸困難な事である。むしろ枯草は我々の生活にまつて一つの厄介物ではない。然し彼等にまつて一年中の薪炭は、この枯草で役立てねばならない。背丈の二倍も繁つた夏の青草を程よく刈りまつては冬のたきものに備へてゐるが、尙足りない所を冬が來れば木の根、草の根を掘り取つて迄それを補はなければならないのである。こうした高原一帶の此の雜草がされ程高價なものになるかは、一寸我々には想像も及ばないのである。七七練兵場の八十萬坪に生繁つた雜草が八千餘圓の賣上げを示すそうであるから。

そして草ある日は是を刈り、草なき冬は草根木皮をほり取る者がみな男云はす女云はすこの老人なのである。

大蒜の香りにみちた吐息をはづませながら、苦りきつた顔に疲れきつた餘生の限りをにじませつゝ、それでも尙長煙管を口にする事を忘れないで瓢々ミ薪物をあさるのである。然し青年はオンドルの上に晝云はす、夜云はす墮眠を食り、醒めては居酒屋でコップ酒をあふり、哀調切々なるものを口づさんでゐる。

そして「ジョンくナール」ミ云ふ言葉がしきりに歌はれるミ云ふ事である。「遊べく若い時は再び來らず」ミ云ふ事だそうである。

如何に彼等は現實的なそして一時的な快樂の上に生を送らうとしてゐる事か。全く亡びゆくものゝ表徴でしかあり得ない。

生計維持者としての中心が誰にあるか、そして老人ミ青年、更に親子の關係は是だけでも推す事が出来るであらう。

こうして彼等は快樂を追ひ、そして一時的な喜びに酔はうとする事が青春期の凡てである。従つて老年に至つて尙營々ミ自らの口糊を稼がねばならない云ふ事はもより覺悟の上なのである。第三者として我々がこの痛々しさを眺める程、彼等にミつては老人の働きミ云ふものゝ苦痛を意識してはゐない。

「大豆を播いた所に大豆が出来、小豆を播いた所に小豆が出来る」ミ云ふ彼等の諺があるが、これ程彼等は運命のは認者であり、宿命的である。何の焦燥ミ云ふものも認めないで、こうした精神の上に、腰を据えてゐる彼等の膽魂に、また朝鮮藝術の一つの根源がある。

文化は、そして藝術は生活が生むものでなくてはならない事を前にも述べた。その意味からしても民族の起居する住居の一端をうかゞふ事も亦意味深い事であり、同時にその民族が作り出した文化、特に私の云はんミする朝鮮民族が生んだ藝術品への理解ミ、そしてその線が秘むる様々の秘密を解く事に少からぬ役割を持つ事を知るのである。

朝鮮の家屋は低い。そして三方は凡て土で塗りつめられてゐる。僅か残された一方は明るい光を充分に吸ふ事の出来ない小さな入口を持つ他に窓ミ云ふものはない。此の太陽ミ光を失つた薄暗い陰氣な部屋が、彼等が酒宴に酔ひ、歌ひそして又人を迎え、人を送るべき凡ての場所なのである。

私は此の場所に、生活に疲れ、なりはひに衰へた老人が長い煙管を口にしたまゝ吸はうミもしないで茫然ミ點座してゐる姿をしばく見受けたのである。

活々とした活動ミ云ふものを忘れきつた様な此の點座の存在が、何を冥想し、何を追憶してゐる事か。私は此の疑問を解く事も、彼等の藝術の心に近づくべき一つの道である事を想起するのである。私は彼等の心に近づく最も近道は、先づ彼等の子供心に觸れてゐる事であるミ云ふ事を考へてみる。泥ミ垢にまみれた着物に垢だらけの身を包んだ數名の

群をしばらく見受けたものである。然し如何に戯れ、如何に遊んでゐても、嬉々大聲で笑ひきつた子供らしい笑顔を
見受けた事が一度もなかつた。鐘詰の空鐘や棒切で土を掘る以外に、何らの玩具にも恵まれてゐない云ふ大きな原因
があるかも知れない。然し、玩具以外に彼等を喜ばすべき親心の缺乏云ふ事を考へなくていいだらうか。

私はあの美しい筈の白衣が汚いまでによごれきつてそして子供を背負つてゐる親達をよく目に止めた。洗濯物を、又
は水甕を頭に往き來してゐる女達であつた。背負つてゐる子供が如何に泣き號んでゐても頓狂な聲をはりあけて叱る以
外に、操す事を知つてゐる女達は稀であつた。

通學の途にある子供達にしても、あの樂しげな語らひも、笑ひも、そして學童特有の朗らかさ云ふものを知らない。
むしろ彼等は大聲で語り得る子供らしい屈託なさ云ふものを壓さへられてゐる。その暗い壓力を一體何處に求むべき
であらうか。

街路樹の株に蹲つて容易に立たうもしないで、悠閑に、長い煙管を燻らせてゐる白衣の人は、一年中多忙云ふ事
を知らないであらうか、又爲すべきを知らないのか、それとも爲すべき何ものをも持たないのであらうか。

寒風のすさぶ荒原にたゞ一人、積雪の中から枯草を拾ひ集めてゐる老人の姿をしばらく目にしたのであるが、廣い畠
の耕しに一人、二人が此處彼處に茫然と銚を執つてゐる淋しさも、同じ感じを抱いたのである。

凡てに縦の直線を缺いた朝鮮の平原に、こうした點景を見る事は、確に一つの寂寞の淋しさ云へる。それは活氣の
缺乏も、働きへの努力も、凡てに對する熱心力の消失を意味してゐる。謂はゞ流るゝまゝに流れ、なるがまゝに動いて
ゐる無自覺、無反省は、生の持て餘したもの、たゞ食の爲に餘儀なくされてゐる考へられない事もない。

然しよき觀點から是をみる時、朝鮮藝術の製作は獨り茲からこそ生れ出たものでありはしないだらうか。少くとも彼

等がものした線の底を汲む時、汲めども汲みきれない不可解な、そして複雑な彼等の生活状態を反映してゐる事も確かである。

木の切れ端一本を無心な赤子を背負つて奪ひ合つてゐる女達である。金銭の支出云ふ事をしないで生活を立てようとする事は、むしろ彼等の習慣でさへある。生活程度の低落さか、向上さか云ふ事は更に問題ではない。探し求めて食ひ得たらそれが唯一なのである。生活程度に對する此の傳統的な無反省さは、所謂半島内に於ける將來の、少くも現代の文化に向つて確かに一つの支障である。

然し私は過去の半島藝術があれ程迄によき線をみせてくれた事に對して、此の一大支障を支障さとは考へたくはないのである。(勿論來るべき日の藝術を生む爲には一つの覺醒を要する事は事實であるが。)

生活に齷齪せず、樂しみを忘れた複雑な想ひを、點々秘めきつた彼等の魂を、是等の曲線に訴へる事に於て我自らを慰め、又同胞を慰めようとしたのではあるまいか、たゞそうする事のみがかかる藝術を生み出した唯一の根源であつたさへ私は考へるのであるから。

朝鮮民族が棲む家屋云ふものも、一般に半島部落が共有する所謂原始美に漏れないのであるが、彼等は單に此の原始美に満足してゐたのであらうか、

私は茲に一つの大きな驚異を感じるものがある。それは先に一言した「彩筐塚木槨」の威容である。幸に私は平壤博物館で特に寄せられた「平壤小誌」を手にしてゐる。本邦最古の木造建築物として是を紹介した一節がある。

「昭和六年秋の發掘にかゝる南井里の二百十六號墳は卷頭の寫真に見ゆる曠古の逸品漆畫竹筐を出したので有名であるが又その木槨は規模宏大構造珍奇從來未曾て樂浪に類例なき莊嚴なものである所から、昭和八年夏牡丹臺博物館の

前庭に移築され本邦最古の木造建築物としてありしまゝの姿を観る事が出来る事となつた。

本墳の内容は北方に幅四尺餘長さ五間の細長き美道があつて前室即ち副葬品室の門扉に通じ、前室の奥には更に棺を納めてあつた玄室が設けられてゐる。棺は三個で何れも漆塗りの木棺であるが就中朱塗、黒塗の各一個は結構壯麗を極めて居る。

前室の廣表は東西内法約十六尺南北内法七尺許り玄室は東西内法約十一尺南北内法十五尺許りであつて二室の間仕切りにハ儼然たる門扉が設けられてある。木槨は鼠色粘土の基礎の上に直に二重に木材を敷き並べて床を作つてゐる、而してその玄室は床上に木材を約十層許り積み重ねて四壁を築造したものであつて、その積み重ね方は木積みと横積みとを交互に恰も塼槨墳に於ける塼の積み方と同様の式に則れるものである。壁の厚さは實に四尺に達してゐる。前室は他に類例多き二重の木槨であるが南北西面の三壁には、黒、朱、緑、青、黄色等よりなる壁畫がある。樂浪としては最初の發見である。殊に西壁の分は馬上の人物や立像など可なり明らかに認められ胸の張りたる基盤尻の駿馬などの風采は恰も漢の畫像石を聯想させるものがある云はれて居る。天井は角材を三重に重ねて覆ふたものである。

規模、構造、裝飾の全體から考へれば當時如何に斂葬が鄭重であつたかをも察することが出来る。」

云ふのである。

是で大體その規模構想云ふことは推案出来ると思ふのである、が一二附加してみるに奥室には三棺の寢棺がある。朱塗の大棺を中央にして他の二棺がその左右に並んでゐる。此の朱棺が男性であつて、他は女性である云ふ事はその装身具等で認められるのである。さうさなく夫婦間の愛情細やかなものが髻髻として胸を打つものがある。

副葬の遺物には百餘點ある云ふことであるが、現に數十點のものが博物館に收められてゐる。例へば耳、杯、硯、

匣、篋等の漆器や、瓦器等でその頃王侯が使用した是等を通じてその生活を想像する事が出来るのである。

中にも人物畫像の漆釜は色彩に於て、その精巧さに於て東洋最古のものだ云ふ事である。

かゝる當時の秘密を解くべき幾多の古墳が、續々發掘されあらゆる方面に興味深き多くの資料が提供されつゝある。此の九月初旬より道濟里五十號墳の埴壇墳と石嚴里の二百五十七號墳の何れもが東大關係の人々や樂浪研究所關係者によりて發掘が續けられてゐる。既に二千百餘年前に使用された綿の發見や、鳥模樣を彫刻した石膏製の釵（ヘアピン）に二千年前の白粉や小箱が發見される等斯界の人々を狂喜せしめてゐる。樂浪、高勾麗の時代を経て尙幾多の文化のあとの再現が豫約されてゐるだけに此の種の發掘が多くの興味と期待を添へてゐる。

尙古墳の次いでに江西面三墓里にある高勾麗古墳について紹介するならば、是は先の木造に比して良質の花崗岩を積重ね墓室を作り内部の周壁天井には磨研を加へ平滑とし上に極彩色の壁畫を描いてゐる、その色彩の華麗、圖様の様式は支那南北朝美術の影響を示し、我が飛鳥時代 of 美術と伯仲するものである云はれてゐる。

かくの如く木造に於て、又石造に於て彼等は優秀な技能を建築方面に向つても藏してゐる事が知られ、そして、平原の中に高粱ぶきの土饅頭の様な家屋の中に安閑としてゐる現在の彼等からは到底想像も及ばないものなのである。

彼等の現在が現在であるだけに、過去は過去として新しい驚異を今更痛感するのである。

私は今かゝる古墳に迄追求するの要を認めなかつたのであるが、一つは彼等の建築に向つて、尙その根源的なものとしてかゝる豪壯な墓墳を構へた彼等の心情を汲み取つたからである。

半島民族が古來用ゐた諺の中に「親の病には我が指を斷つ」云ふのがある。朝鮮には我が指を切つて血を飲ませる云ふ美諺が澤山ある云ふことである。

「雨が降つて苗を移す時、祖先の墓を移せ」こか「曲つた木は祖先の墓の木」こか云ふのがあるが、何れも是は祖先の爲に風致よき場所を選ぶこゝであり、一度葬つた亡靈への追憶を新にし、そしてそのよき冥福を祈る事を意味するのである。

その影響は儒教にあつたにせよ、又佛教にあつたにせよ、豪壯な墳墓の構築は名譽の爲でもなく、地位の爲にでもなく、たゞこの慰靈云ふ純情に於てのみその意義が高められ、深められるのであつてほしい。

野に土に土饅頭型に盛られた墓だが、手向けらるべき花もなく、薫ぜらるべき香もなくして、雜草の中に埋められてゐる悲しい現狀を隨處で見受けるのである。

然し彼等はいくら靈所を立派に建てゝも、祖先のお祭が出来なければ何になるか云ふ事をその諺に云つてゐる。

果して是等の諺が朝鮮本來の民族性を語るものであるかきうかは私にはわからないのであるが、偶々短期現役兵として入營した江西公立普通學校の横山君が鮮語に明るいのを幸に、こうしたものを翻譯してもらつたのである。除退後尙多忙の中から私の此の要求にそつて俚諺をよこして呉れた君の厚意を茲に感謝する。

かくして多方面に燦然と輝いた彼等の文化の中に、所謂藝術的なものが如何なる根源に於て創生されたのであるか。最初から私は此れを解決しようと思ひきた。特に彼等の此の複雑な文化史の中に、彼等の文學を探らうとする興味と、好奇心に至つては尙盡きないものがある。然しそれは解語に盲目な私によつて到底及びもつかない不可能な事として諦めねばならなかつた。此の大きな淋しさも、物足りなさもが殊更彼等の線に向つて意を注いだ所以でもある。線に對する重複と贅言があるにすればそれは今の理由に基く事を諒されたい。

終りに臨んで私は考へる。彼等の日常生活が暗いものであり、樂しみを忘れたものである限り、自らそれに伴ふ生への悲哀がたゞそれを慰め、それから解放されんとするやまれない要求が、此の曲線を生み出した唯一のものであつた。

同時に此の曲線を愛撫する事が彼等のこの傳統的な鬱積された氣分の緩和でもあつた、私は解するのである。

従つて彼等は藝術の爲に藝術を生んだのではない。先にも一寸觸れて置いたように、勿論半島を代表する藝術は樂浪高勾麗のものであつた。そしてそれは獨り特殊な城内の生んだものであらう。然し、城内の支配階級にある人々が既に斯うした線を生んでゐる限り、一般民衆は更に悲慘な哀調を刻み、書き、訴へた事であらう。たゞひ作品として殘された何ものもなかつたとしても、彼等の魂に刻まれた作品は、より慘めな、痛ましいものゝ悲劇であつたに違ひない。

鬱積された幾多の複雑な感情の慘み出たものが彼等の作品でありはしなかつたらうか。

表はれようとして表はし得ず、發しようとして發し得なかつた様々の感情の吐き所が、彼等の選んだ柔い曲線であり、そしてそれに漲つた清楚と純朴であつたらうと私は推定する。たゞひそれが私の憶測であるにしても、斯う眺める事に於て朝鮮美術工藝のより深き色調と、線の神秘に近づき得る事を自信してゐる。

彼等のその感情の吐露が、自暴でもなく、自棄でもなく、その感情の緩和の爲に靜かなる線を選んだ所に、東洋的なそして彼等の處まじさが輝いてゐる。是を最も明らかに證明するものは慶州佛國寺のあの點座せる尊像であると思ふ。(此の線、此の靜けさ、此の安らひについては稿を改めたいと思つてゐる。)そうである限り、此の半島藝術の粹と云ふものが、獨りこゝに胚胎してゐると思ふ。

藝術と云ふものはその本質に於て、私の解するように、ものに對する恭敬な精神の純粹なる活動である限り、その作品は即ち恭敬なるものゝ表徴である。

若し此の半島民族が生んだ是等の作品が今尙その驚異を謳はれる様に、將來に向つて更にその特徴と獨創が讚美されることしたら、その不朽なるものゝ根源は、此の恭敬なる魂の崇高さにある事を私は強張する。何が故にこの恭敬なる魂は、ものに對するよりよきものゝ根底を築き上げるであらうかは、又改めて稿を起すであらう。(終)